

コラム①

高校教師について

井上 茂

(敬愛大学特任教授)

高校教師とはどのような職業でどのような人がなっているのだろうか。小中学校の先生に比べて専門性が高いと言われることがある。かと言って、大学の教員ほど専門性が高いわけではなく、研究者というよりは教育者である。

実際、小中高の教師は、児童生徒の発達段階は違えども、教科指導、生活・生徒指導、学級経営、様々な事務処理、さらには部活動顧問など多岐に渡った仕事をこなしている。

その中でも高校教師は相対的に専門性が高く、上記の職務に関しては公立高等学校のほとんどが県立のため市町村教委の指導助言はなく、県教委からのゆるやかな指導助言はあるものの各県立高等学校の管理職の指導助言の下、学校単位で判断し学校運営がなされていることから、高校教師の学校経営への参画意識は高いといえよう。

特に、毎年高校入試の結果により各高等学校の評価が大きく変わることもあるため、各高等学校は特色を打ち出しそれをHPや高校入試説明会等を通じて、中学生・保護者や中学校の教師たちに知ってもらう努力をしている。

したがって、高校教師は日ごろから自校の特色作りに精力的に取り組む。また、高等学校の管理職においては、学校経営にしても人事にしても、小中学校の管理職よりも判断する範囲が広く責任がより重くなっているのである。

高校教師のやりがいとは何であろうか。団塊の世代から団塊の世代ジュニアが大量に大学受験をしていた時代は、受験競争を勝ち抜くため多くの高校生は大学入試のために必死に受験勉強をしていた。

そのため、高校教師も大学入試問題を研究し、その対策を授業や補講を通して生徒に噛み砕いて教え込み、生徒の夢の実現に応えたのであった。

しかし、1990年代に入った頃からは、高校3年生の秋に実施されるAO入試、指定校推薦、公募推薦といった学力を問わない入試制度が拡大し、受験勉強は中堅上位校以上に在籍する高校生だけのものになってしまった。その結果、入試に対応できる学力を身につけさせる指導をする高校教師が激減し、中堅上位校以上である約4分の1の高等学校に勤務する教師に限定されるようになり、多くの高校教師のモチベーションが下がったのである。

ベテランの高校教師の多くは受験指導に存在価値を見出していた。しかし、彼らすべてに進学重点校等上位校を目指して公募選考を受験するほどの意欲と実力があるわけではなく、また、敢えて望んで教育困難校に異動して生徒指導で苦勞する意思もない。非進学校の学習面では、中学校での積み残しに対して様々な工夫をしてドリル学習などを導入し、基礎学力の強化に取り組んでいるだけなのでやや魅力に欠けると思いがちである。

その結果、専門性が著しく高い一部の高校教師は、異動の際上位校のみが採用している公募制を活用し、進学重点校に異動していくのであるが、その他の高校教師は、受験指導があまり必要ではなく、かつ生徒指導でもあまり苦勞がない中堅校への異動を希望するという構図ができあが

ったのである。

中堅校であれば、これまでに身につけた知識・技能で十分教えられるから、比較的楽ができると考え希望するのであるが、現実はそのほど甘くはなく、これまでに身につけた知識・技能だけでは通用しないことに気づくのである。

時代は急速に変化し、生徒の生活する環境も変わり、考え方すら変化している。時代の変化に応じて学習指導要領が求める内容も変わった。高等学校学習指導要領〔最新版〕には、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を偏りなく身につけさせることと記されている。

したがって、高校教師には「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」や「コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用」した学習活動の充実が求められている。すなわち、高校教師はどのタイプの高校に異動しようとも日々研修を続ける必要があるのである。

また、高校教師には、厳しい生徒指導力ではなく、教育相談の機能を活かす広義の生徒指導の力が求められている。学校現場では、チームを組み対応することが多くなっているが、研修が不十分であったり、コミュニケーション力が不足している教師は生徒や保護者とのトラブルを引き起こしがちであり、指導力不足を露呈させてしまうのである。

高校教師にとって岐路はどこにあるのだろうか。高校の教職員全員に対する、いわゆる人事評価が始まっている。それは目標で育てる「目標申告制度」と評価で育てる「業績評価制度」から成っている。学校間格差があるなかで、評価基準の客観性も問われるところであるが、毎年上記人事評価により、教員間の評価に多少なりとも差が表れる。そうした中で、各高校教師は自分の目標としてスペシャリスト（教諭のまま専門性を高めていく）を目指すのかゼネラリスト（管理職）を目指すのかを判断していくことになる。ゼネラリストを目標にした場合は、何段階もふるいかけられることになり、指導主事や主幹教諭、さらには教頭・副校長や校長になるためにそれぞれの選考試験を受け合格していかなければならないのである。

高校教師にはゼネラリストを目指すかどうかを決断する時期が40歳ごろに訪れる。そのためのために、20代～30代は学校で必死に働き、上司・同僚や保護者・生徒にもまれて、基礎力を身につけ自分を作ることが貴重な選択肢となる。学校という組織は、児童生徒ばかりではなく、教師個人が学べる貴重な場なのである。

コラム③

高校教師のタイプ、高校間格差、同窓会

穂坂明徳

(前日本赤十字秋田看護大学教授)

はじめに

高校進学者が急増した時期に、私自身高校教師として、新設・中堅校→新設・教育困難校→進学トップ校（伝統校）とキャリアを移行しました。

今回の調査に当てはめれば、高校間格差の非進学校（I）～超進学校（V）の学校を教師として過ごしたことになります。その後は大学のほうに移り、大学教員を先頃まで20年ほど勤めました。

こうした自身の教育現場経験と重ねながら、今回の報告内容を読ませていただきました。以下は、高校の実態を踏まえたコメントになればと思います。

1 高校教師のタイプ

回答者の属性データの分析上の参考までに、私の経験観察から高校教師に関して、概ね六つのタイプを類型化しておきます。

①「燃える教師タイプ」—生徒や子どもといつも一緒にいるのが大好き、クラス経営にも熱心、あだ名も付けられやすい。

②「部活に打ち込むタイプ」—運動系はもとより文化系でも、教師になった動機が自分の興味分野や専門性が生かせるのでというもの。運動系はややもすると勝利至上主義に走りがち。

③「サイレントマジョリティータイプ」—目立たない、ひたすら与えられた業務をこなし、同僚から声をかけられれば反応する。高校教師であるということだけに満足していて、それでも多分自分なりに教師意識や密かな楽しみや趣味があるのかもしれないが、あまり自分を見せることがないので、空気のような先生。高校という職場は教科専門の殻にこもることができるので、このタイプはかなり多い。

④「上昇志向の強い実務者のタイプ」—将来は教育委員会に入り、教育行政に関係し、校長や管理職を目指そうという野心家。ただし、普段はそうした気持ちは仲間の教師には見せず、仕事面、人付き合いや保護者とのコミュニケーションもそつがないので、管理職からは目を付けてもらいやすい。

⑤「教科のエキスパートタイプ」—大学・大学院で専攻してきた専門知識をもとに、教材研究、授業研究や参考資料（書）作りに熱心なタイプ。学校運営にはあまり関心なし。

⑥「研究指向のタイプ」—自分の専門研究のテーマをもち、大学に残らずなお生活と研究時間が確保できるので高校教師になったと思われる。自分の研究に関わる話題や関心を示す生徒には入れ込んで関わる。研究志向タイプの先生の幾人かを参考までに挙げておきます。

i 生物の教師で、チョウチョウにほれ込んで、神奈川県内の山野を調査し、チョウチョウ（そ

れも特定の種類)の生態を知り尽くし(?)、自宅ではさなぎから成虫までを飼育し1年中24時間チョウチョウから離れられない先生。

ii 国語の教師で、夏目漱石の研究に打ち込み、本格的な漱石本を執筆。

iii 数学の教師で、東大・物理学科出身で高校では数学を教えていましたが、生徒にはツボを的確に押さえ、わかりやすい授業で好評でした。ご自身は、パソコンや情報関係のテキスト、解説書などを執筆して、何冊も公刊。ただしこのタイプの教師は少数です。そして、学校にはシニカルで冷めた目をもっています。

2 以下からは、報告書の内容に即したコメントです。

(1) 回答者の属性(性別・年代別・学校間格差別)の3項目ですが、回答者の職位によってかなり回答に傾向が現れるのではと思いました。

ちなみに比率は、管理層11.1%、中間管理層38.9%、ヒラ教師49.3%のようです。学校間格差が職位によってどのように意識されているのか興味あるところです。

(2) 生徒像に高校間格差が明確にでているようです。I・IIタイプ(非進学校)とIV・Vタイプ(進学校)では数値でもはっきりしています。

その対比としては、学校生活への向き合い方が真剣か遊びか、学校への規範意識が強い・弱い、ロイヤルティーが高い・低い、生徒の姿が優等生タイプとそうでないタイプ、将来への目的志向がある(強い)・あまりない(弱い)、何事にもアクティブ(ポジティブ)・無気力(シニカル)などの対類型が浮かんできました。

(3) 私も進学・非進学で高校が明確に線引きできると思いました。その意味解釈としては、「希望の進路に進めない」「自分で決められない」の2項目が非進学校の生徒に多く見られるのは、経済格差と自分自身の将来の先が見えないことが大きい。一方、「海外の進路」「理工系女子」の2項目が進学校の生徒(特にVのタイプ)に際立つのは、経済的にゆとりがあり将来にも期待ができる自分を反映している結果と読みました。

(4) 教員人事の一般原則としては、暗黙に新卒者や若手の教師は若さと情熱、生徒との年齢が比較的近いのでコミュニケーションをしやすいなどの利点を考慮して、非進学校や底辺校に配置されやすいようです。逆に経験豊富なベテラン教師は、進学校に向けられます。

しかしこれには裏事情があり、前者のような困難な勤務校は、一般に教師は皆敬遠しがちです。行く教師が少ないので勢い余り経験もなく、発言力も弱い若い先生を配置する(教育委員会もそのほうがやりやすい)。一方、進学校はある程度経験を積んだ教師や専門性の力のある教師なら勤務しやすい環境です。それに保護者や社会的な目線も好意的です。したがって、教師のキャリアパスとしてベテランが行くことが多いようです(私自身は、本来教育困難校ほど経験豊かな教師を配置すべきと考えてきました)。その辺がデータから読み取れると面白いのですが。

(5) 教育指導の高校間格差に関して、考察では、「ほとんど学校間格差による差はない」と簡単に結論付けていますが、果たしてそう言い切れるのでしょうか。 (以下略)

高校教師の意識調査を行った武内清・敬愛大学客員教授は、現在の高校間格差は生徒が勉強や受験、部活動や将来に関して意欲的かそうでないかという違いとして表れると指摘する。

高校格差 教師の意識は



武内 清

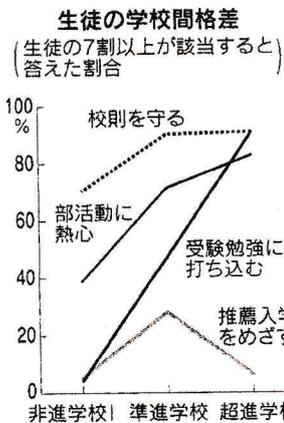
敬愛大学客員教授

対して、非進学校の教師は、反抗的で勉強に興味を示さない多くの生徒に対して厳しい生徒指導で臨んでいた。

しかし、その後の高校の受験競争の緩和、多様な政策、推薦・AO入学の導入、少子化の進行等々によって高校現場は様変わりしている。高校教育の様々な側面から見た学校間格差は、現在も存在するのであるか。

戦後、高校進学率が上昇する中で、学力(偏差値)による輪切り選抜が進み、高校間に格差ができて、入学してくる生徒の特質や教師の教育指導にも学校間で大きな違いが生じた。進学校の教師は適応的で意欲的な生徒に対して、授業中心の指導や生徒の自主性を重んじる指導を行っていたの

非進学校「無気力」に悩み



準進学校、進学校、超進学校の5群に分けた。教員の属性でみると、男性、中堅が進学校に多く、女性、若手が非進学校に多い。生徒の特性でみると、超進学校には「熱心に授業を受ける生徒」「授業の予習・復習をする生徒」「受験勉強に打ち込む生徒」が多く、非進学校にはそれらは少なくなっている。部活動や学校行事に熱心に参加する生徒も進学校、超進学校に多い。「大学への推薦入学をめざす生徒」は準進学校に多い(グラフ)。「海外への進路に興味を持つ生徒」「理工系の進路を選ぶ女子」は超進学校に多く、「経済的な理由で希望の進路に進めない生徒」「進路を決められない生徒」は非進学校に多い。どの群の高校でも、教師は皆熱心に指導を行っている。「生徒の質問や相談に親身に答えている」「(9割強)」「授業のやり方をいろいろ工夫している」「(9割弱)」「授業では指導案や講義ノートを作っている」「(6割)など、丁寧な授業準備やその実践に関して、学校間の格差はほとんどない。「生徒指導に力を入れている」は非進学校に多い(8割以上)。

校則守り 反抗少なく ■生徒の関心 寄り添って

で8割弱と多少多いが、超進学校(7割弱)と大きな差ではない。教師たちが授業で「とても大事」だと思っていることを聞いてみた。進学校では「大学受験に対応した授業」が9割強を占めるのに対し、非進学校では「職業に結びついた知識や技能が得られる授業」が8割強という違いがあった。「基礎的な力の付く授業」や「生徒が興味や関心を持てる授業」「アクティブラーニング」に関しては顕著な差はなく、どの学校の教師も大事と思っている。教師たちは、それぞれの学校の生徒の特質(生徒文化)に合わせた教育指導を工夫している。それが教師の生き残り戦略でもある。現在、文部科学省主導の高校改革が進行中で、科目の編成や大学入試も変わるものとしている。一連の改革の動向や新学習指導要領の動向に関心を寄っているのは、超進学校の教師たちである。一方、それ以外の高校の教師は、現在の改革が実際だが、昔からある教育の

の学校や生徒の実情に合っていないことに戸惑いを感じている。そうした戸惑いは、調査に寄せられた教員の生の声からもうかがうことができる。「生徒の実態を見てほしい。目的意識も持たず、ただ皆が行くからという理由で入学し、入学後も努力することなく、ダメなら退学すればいいやと割り切っている生徒がいかに多いことか。バイトに明け暮れ、授業中は寝ている」

「現場では様々な新たな取り組みが行われている。問題はどこにかくマンパワーやお金が入り不足している。英語の外部検定試験の機会やデジタル機器の所持などは、経済的な問題を抱える家庭では十分に対応できずさらなる格差を生むのではないかと懸念している。高校教師たちは格差を越えて、それぞれの地域の学校の伝統や生徒の特質に応じた教育指導、進路指導をきめ細かく行うことが今求められている。

調査からは、高校間の格差は現在も依然として存在するといえる。それは、生徒が勉強や受験、部活動や将来に関して意欲的かどうかという格差(違い)である。上位の進学校が実績や伝統を重んじ、生徒の資質や実力をさらに伸ばす教育努力をすることは当然である。国際競争力を伸ばすためにも卓越した教育は必要だからだ。

一方で、関心が勉強や受験以外に向いている生徒が多い学校も存在し、その生徒らの特質に寄り添うことも大事だ。総合的な知をほぐくみ、高校を魅力的なものにし、卒業後は地域への定着を進める実践も報告されている。外国籍や特別支援の子供たちも多く入学する学校も増えている。

「新しいことをどんどん取り入れることも大切だが、昔からある教育の

原点のよつなものを忘れてはならない」と感じている。